

卒後
17年目

織田 彰子 医師

水戸協同病院／水戸地域医療教育センター 神経内科・講師(2017年11月現在)

現在、私には5歳と3歳と1歳の子どもたちがいます。どのように3人の子の育児をしながら、神経内科の医師として働いているかをご紹介します。

私は24歳で筑波大学を卒業し、同大学のレジデントをスタートしました。27歳で内科認定医を取得し、30歳でレジデントを修了、その後大学院へ進学しました。神経内科の専門医を取得し、34歳で大学院を修了、博士号を取得しています。

筑波大学附属病院水戸地域医療教育センターで神経内科の講師に着任し、数か月後に結婚。第一子を妊娠し35歳で出産しました。夫が遠方で単身赴任をしていたため、一人で家事・育児をしなければならず1年半の育休を頂きました。育児休暇中に第二子を妊娠し、36歳で職場復帰。37歳で第二子を出産し、この時も1年半の育休を頂き、その間に内科専門医を取得しました。運が良かったのは、内科専門医制度の過渡期で移行措置があり、内科認定医を持っていると試験を受けるだけで内科専門医を取れたことです。第三子を妊娠した状態で仕事に復帰し、39歳で出産。この時は3人目ということもあり、9か月で育休を切り上げました。40歳で職場復帰し、現在4人目を妊娠中。来年の4月に生まれる予定です。

一人で3人の子育てをしながら働くのは、とても大変です。特に困るのは、子どもが病気になった時。普通の保育園では病気の子どもの預かってくれません。そんな時は水戸協同病院の中にある、協同病院・県医師会・ファミリーサポートセンターの三者が協力してつくった保育ルーム^{*}を利用します。ファミリーサポートセンターの支援会員さんを依頼し、仕事が終わるまで子どもをみてもらいます。ここでは利用料の半額分、病院と県が4分の1ずつ負担をしてくれているのでとても助かります。

こんな大変な思いをしながらなぜ働き続けるのかと、疑問に思う方もいるでしょう。しかし、やはり外に出て働くということは刺激や変化があり楽しいです。経済的にも安定します。また、子どもたちにとって良いこともあります。家庭ではできない大きな遊びを小さい頃から体験できますし、親以外の先生や友達との人間関係を学んだり、子どもにも良い刺激があると思います。

育休中に専業主婦の期間がありましたが、家事・育児をやるのは、想像以上に大変です。家にいるほど掃除や家事の量が増え、育児量も多くなります。収入は減るのに支出が増えるの

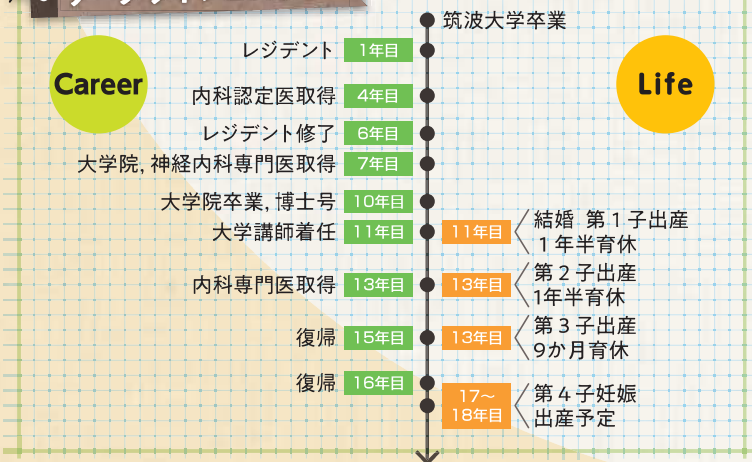


も、精神的に厳しいものがありました。よく、専業主婦の方が子どもとの時間を取れると思われがちですが、そんなに甘くはありませんでした。子どもにゆっくり本を読んであげる時間さえも、ほとんどありませんでした。復帰前は、家事と育児に仕事が増えることに不安を感じましたが、実際には外に出ることによって家事と育児の量が減るので、大変ではありますが、そこまで負担にはなっていません。

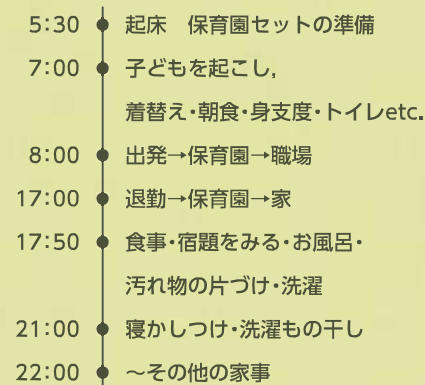
私は医師11年目で、専門医などの主な資格を取ってから結婚・出産をしました。医師としてある程度独立していて、資格試験のサマリーに追われることがなかったのも非常に良かったと思います。妊娠・出産のタイミングによって、生じる問題や困難は全く変わってきます。タイミング以外にも、夫に家事や育児の能力があるのか、近くに祖父母がいるのかなど、自分や周囲の状況によっても変わります。もし研修医の段階で妊娠したら、また違う悩みが出てくるでしょう。ただ、周りにいる人たちは皆親切です。いつでも手を差し伸べたいと思ってくれている人が沢山います。非常に有り難いことです。しかし、どうやって助けてあげればいいのか分からないということがあると思います。今後、様々なタイミングで結婚や出産をして働き続けるロールモデルが増えることによって、必要なサポートが分かり、対処法が増えてくると思います。

現在、残念ながら働く人は育児をしないということが前提に動いていると痛感しています。5時に退勤しても、子どもたちを寝かせられるのは9時です。しかし、会議は6時以降、講演会や勉強会は8時以降ということが多々あります。そういった機会には私は参加できていません。今後、今はまだ少数派の育児をして働くということが、普通のことになればいいと期待しています。

ワークライフストーリー



ある日のスケジュール



^{*}保育ルームについては32ページで紹介しています。